

定期的に歯科医院に通い続けてきた記者(四)は昨年、右下顎の骨に腫瘍が見つかり、切除手術を受けた。世界で九例目という希少な症例が分かり、適切な治療を受けることができたのは、定期検診と口腔外科、歯科、矯正歯科の連携があったからだろう。体験を三回に分けて紹介する。

(白井春菜)



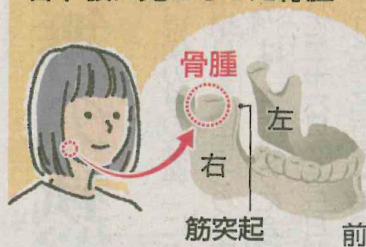
口腔外科手術体験記

— 上 —

幼い頃から、就寝時の歯ぎしりや奥歯をかみしめる癖がある。よく顎が痛くなり、診てもらったと大抵「顎関節症」と言われていた。

異変が現れたのは昨年二月。数カ月間続いた右顎の痛みが治まったと思ったら左顎が痛くなり、口が普段の半分

右下顎に見つかった骨腫



口が2センチしか開かない！



木さんも「骨のようだが、この位置に片方だけあるのは見たことが

その日は偶然、当時愛知学院大歯学部付属病院(同市千種区)の口腔外科医、佐々木惇さん(三三)写真が診察していた。だが、年間数千人分のエックス線画像を見る佐々

の二センチしか開けられなくなった。初めての症状に焦り、二年ほど前から三カ月ほど一度定期検診を受けている名古屋市内の歯科医院を受診。エックス線検査をすると、右下顎に数センチの塊が写っていた。

「見たことない」数センチの塊

核医学(RI)検査 特定の組織や臓器に集まる性質がある「放射性医薬品」を主に血管を通じて体内へ投与し、薬品が出す微量な放射線を専用の装置で撮影することで、細胞の機能や代謝情報を調べる検査。腫瘍の良悪性の鑑別や治療効果の判定などに用いられる。RIは薬品の成分となる放射性同位元素(Radio Isotope)の頭文字。

「悪性腫瘍かもしれない」と不安がよぎった。

三日後、医院の紹介状を持って同病院の口腔外科を受診。より詳しい画像を撮り、佐々木さんに説明を受けた。海外の論文を探し、複数の口腔外科医で協議したが、顎の塊が何なのか、取り出して成分を調べないと特定はできない。切除しても痛みがなくなるかどうかは未知数。

治療法を探るため、同年三月にCT検査、MRI検査も受けた。決め手となったのは、その翌月に名古屋市立大付属東部医療センター(千種区)で受けた核医学(RI)

検査。患部が細胞分裂を繰り返し、成長していることが分かったのだ。

別の病院へ移った佐々木さんに代わり、主治医となった口腔外科専門医の長谷川正午さん(五二)から「良性の腫瘍だ

と思うが、このままだと口が開かなくなるかもしれない」と説明され、「それは困る」と手術を決意。だが、珍しい症例だけに、手術も簡単にはいかなかった。

(次回は三十一日掲載)